

柴田町住民自治によるまちづくり基本条例審議会（令和3年度第2回） 要旨

日時：令和3年11月11日（水）
午後2時00分～午後4時20分
場所：まちづくり推進センター（ゆる.ぷら）

<出席者>

中嶋紀世生委員、志子田清蔵委員、阿部有子委員、関六郎委員、佐藤正壽委員、村山菜穂子委員、大庭三余子委員（佐々木鉄男委員、児玉芳江委員欠席）

<事務局>

藤原まちづくり政策課長、畑山課長補佐、佐山主任主査

<傍聴人>

なし（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、傍聴席はなし）

1. 開 会

2. 会長あいさつ

3. 会議録署名員の指名

佐藤委員・村山委員（輪番制）

4. 議 事

住民自治によるまちづくり基本条例に基づくまちづくりの実施状況について（テーマ：地域の連携について）

中嶋会長：住民自治によるまちづくり基本条例に基づくまちづくりの実施状況についてということで、今日も地域の連携についてというテーマで進めさせていただきたいと思います。最初に事務局から資料の確認をしていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

（事務局より資料の確認と内容の説明）

佐山主任主査：今日の進め方も流れで説明してもよろしいでしょうか。

中嶋会長：はい。お願いします。

（事務局より本日の議論の流れを説明）

阿部委員：わからないのですが、町に答申する部分だけ抜き出すということですか。例えば地域でやる

ことであっても、地域の人たちに「こういう方法もあるよ」みたいな、それを流すということはできませんが、町に向かってだけの答申ということですか。

佐山主任主査：地域がやらなくちゃいけないことを町に答申する形にしないとイケないので、例えば地域がやらなくちゃいけないことを町に答申するとしたら、それを促すために町はこうしなければいけないとか、町を主語にして答申はしないとイケないのでという話ですね。だから、同じことを言っているかもしれないけれども、地域がこうならないとイケないから、町であるとか外的な部分がこういう仕組みであるとか、制度であるとか、促しであるとか、そういうものを検討したらいかがでしょうかというような、体裁にするということです。

藤原課長：細かい部分はまだ整理がついていないので今後の進め方なんですけれども、町としての支援はこういったものがあつたほうが良いということと、地域ではこういうことをやっていきましょうよというものも合わせて整理したほうが良いんじゃないかとは思っています。

阿部委員：後で地域の部分をどのように持っていくかというのを考えるにしても、これは町でやってほしいけど、これは地域で取り組むべきことだねというのを、一緒に考えていかないと、なんか考えにくいような気がするんですよ。

佐山主任主査：そこに関しても、まず現在の仕組みで解決できないもの、足りないものを全体としてまずしっかり出したうえで、これが現状の柴田町の協働に関することであるとか、地域の連携に関することに対して課題となっていること、問題となっていることだということをまず出さないことには、それを解決するためにどういうことをすればいいのか、地域がどうあるべきか、町がどうあるべきなのかが出せないと思うので、まず全体としてそういうことを考える。そのうえで、町はとか地域はとかというようなことを考えていきましょうというプロセスを一応事務局では考えております。

佐藤委員：私思うんですけども、問題なのは、今の仕組みで不十分であると、新しく考えないとイケないねというのを絞って、それを町に答申しながらやっていって、今のやり方でもできる地域があるがあるけどできないというのは、町の行政と分掌ではなくて活動においてばらつきがあるのだと。それに対して町はどのような支援をしていったらよりベターになるのかというふうに整理して議論したほうが良い。

今町長に答申しようとしているのは、今の町の仕組みで不十分なところがあるのかということをお我々にもんでもらうと。今の仕組みでやれるのであればやれば良い。ところがやれる地域とやれない地域があると、それは町の仕組みとかではなくて地域が抱えている問題と絡んでくるわけです。

最終的に答申したいのは、町が今後こういうふうにしないと、やろうと思ってもできないことがあれば、あるいはもっと活発にすることができるということであれば、そういう仕組みを町に答申しようと言っているわけですね。

もちろん一緒にしますけれども、今の仕組みでやれるのならやれば良いんだよ。ところが実際にはやれないというのは、それは町の仕組みではなくて、我々の長い歴史としがらみでできる地域とできない地域がありますよと、それはきちんと分別しながら、今の仕組みで不十分なところがあるんだという考えが我々の中でまとまれば、それを町に答申して、全体として今までのひっくるめてベターになるので

はないかということですよ。

藤原課長：最終的な整理の仕方としては、町で足りない部分の支援とかあり方というのを整理していきます。仕組みも含めてね。あとは、改善しなければならない部分があっても、上手くいっていないんだから改善してくださいというものも入ってきます。地域としても、やはり温度差があると言われたように、地域としてしなければいけない部分もあるかと思いますので、それはやはり一体として考えて整理していったほうがいいのではないかと思います。

佐藤委員：そこがすごく難しいところで、私もずっと今考えているんですけど、そこなんです。

非常に難しいのは今の仕組みでやればいいということさえも十分にやられていないので、それと仕組みとして足りないのとどうしてもごちゃごちゃになるんですよ。そこをどう整理するか、これはとても難しいと思います。

佐山主任主査：両方大事なんですけれども、多分全部を言えないので、どこかの段階で特にこっちを言わなくちゃいけないというような精査もこれからの議論の中で必要になってくるとは思います。

佐藤委員：じゃあ、参考になるかどうかわかりませんが、町議会でも議論になりましたけれども。

最近中学生、高校生で介護に携わっている生徒が 4.5%という数字が国でまとめたんですね。昔だったらおじいちゃん、おばあちゃんが一緒にいて、子どもも3、4人いて、中学生、高校生が介護をするために学校にいけないという時代はほとんどなかったんですよ。昔は80になれば皆お亡くなりになって、こういうことはなかったけど、今は年寄りも長生きする、しかし6時間おきに薬を飲まなければいけないだ何だといって、お父さんお母さんは働きに行かざるを得ないと、そうすると今の法律では十分ではない現象が出ている。例えば生活保護といえどお金がないから出せるけれども、この中学生、高校生は、もちろん裕福ではないけれども、お金がないわけではない。世話しなきゃいけない老人がいるために学校に行けないという現象があって、今の法律では十分に支援ができない。そこで、ある地域では条例を作ってその条例に基づいて支援をしましょうと動き出した自治体もあるんですよ。そういう感じだと思うんですよ。

だから、切り口は、私の言いたいことはそういうことです。今の条例でやりたいのであればやればいい。だけど、やれる地域とやれない地域があるのは我々の責任というか、いろいろな歴史を織り込んでいる。もう一つ議論になるのは、今言ったように、今までのやり方では対応できない現象が出てきているから、そういうのをどうするんですかということ。私はそういうことの切り口に対して学識経験者の切り口を期待したわけです。

中嶋会長：次に事例紹介に行ってしまうていいですかね。最初に皆さんからご意見の紹介しますか。

佐山主任主査：事前意見シート、資料2に関して、特に補足とかあるようであれば。

佐藤委員：私は十分読んでいないけど、十分読んでも今の切り口で整理されてはいないんですよ。

阿部さん言ったような問題で、やれることとかじゃなくて皆アイデア出しみたいな形でやってきたんですよ。私はこの条例審議会にはアイデア出しではないと言っているんです。

今言った切り口が十分に整理されていればいいですよ。町でもこうやっているように、意見ありませんかって公募していて、ほかの組織でもアイデア出しをする組織はあるんですよ。だけど、この条例審議会が何をどうするのかというのはいまいちもやっていますよ。アイデア出しではないので。

阿部委員：いや、アイデアも出さなきゃいけないと思います。

佐藤委員：だからさっきの整理の中でアイデア出すというふうにはまとめられていないから、そのところもう少し整理したほうがいい。そうでないと、散漫になっていて、いろいろな項目に対して私はこう思いますよという事例が出て、時間が経ってしまいますよ。それを私は心配しています。

阿部委員：具体的にどうしたらいいですか。

佐藤委員：だから、さっき言ったように、今の条例でやれることか、そうでない新しい仕組みが必要なのかという切り口を大事にして、やればいいことと、組織がない、仕組みがないために設けられないことと区別がきくかどうかですよ。一番私が思っている大事な切り口はね。そうでないとごちゃごちゃとなってしまうと思って今心配しています。アイデア出しで終わっちゃったら時間無駄ですよ。

だから、先生がせっかく出すけれども、他の事例やって、ああ他の町はこんなことやっているんですねと言ったらそれでおしまいになるけど、そうじゃない。今必要な切り口でうまく言い切るという整理ができるかどうかだと私は思います。

佐山主任主査：先ほど課長も申し上げたんですけども、佐藤委員がおっしゃっているような今足りない仕組み、そういったものを制度化していくべきなんだというような視点の意見、最終的な答申ですね。そういったものもおそらく重要だとは思いますが、それだけではなくて、現状やれていないことは、一方だけやれて、一方はやれていないことがそのままいいかという話ではなくて、それに対してアプローチする意見というのも同時に大事になってくるので、そこはやはり両方議論するしかないのかなとは思っています。

ただ、それを全部議論すると確かに散漫にもなりますし、時間も足りないということにもなるので、どこかで、ここにしましょうと、今回、地域の連携についてアイデアとか皆さんに考えていただいたというのもまさにそこになるんですけども、ちょっとどこか視点を絞ってやってやるしかないのかなと。

阿部委員：視点を絞らなきゃいけないと思うんですけど、やっぱりある程度段階を経て、いろいろな例とかも出ないと、答申するにしてもこれは町でやってください、これは地域です言っただけじゃ動かないと思うんですよ。やっぱりそこに例とかいろいろな裏打ちが必要だと思うんですよ。だから、無駄じゃないと思うんですね。話し合いは。

佐藤委員：私はそんなことは言っていないですよ。散漫になって時間が無駄になる可能性があるから、さっき言った視点というのを崩さないで議論しましょうと言っているのであって、他の例は無駄だとかそんな言い方はしていません。

佐山主任主査：フェーズとしては、これからは収束していく、まとめ上げていくという段階ですよとい

うことだけは皆さん共通認識を持ってもらえるといいと思います。今までは発散しているというか、アイデアを出していたというところになっているので。

中嶋会長：ありがとうございます。この審議会の目的というのは最後答申というところで、その共通認識を、多分前から参加されている方はわかっていると思うんですけども、少し皆さんで共通して持ったほうがゴールに行きやすいのかなと思っています。

今説明していただくことってできますか。どういうものが答申なのかというか、アイデアをただこういうアイデアがありますよというのは多分答申じゃなくて、やはり審議会として最後、前回は制度作りみたいところで答申していて、そこに参加している方はわかるんですけども、初めての方がなかなかイメージしづらいのかなと思いますので、少し共通認識を持ったほうが。

藤原課長：実際に答申の具体的なものを見ていただければ一番早いかなと思うんですが、基本的には参加と協働を進めるために必要なことということで、例えば今議論になっている町に足りない仕組みであったりとか、今ある仕組みでも変えなきゃならない、改善しなきゃだめだというようなこと、それは今いろいろな意見が出ています、それぞれの立場、地域で状況が肌感覚として出ている柴田町なりのものから出てくるようなことになると思うんです。それと、地域内でもうまくいっていないところがある。それに対して、地域のほうはこのようなことをしていきましょうよというようなこちらからの意見も当然生まれてきます。それに対して、かなり温度差があるということに対しては、最初に申し上げた仕組みの中で、町の支援がないとなかなか地域力が上がってこないということであれば、そういったものも仕組みとか場づくりというところで制度的に考えていくというようなものをまとめる形なので、決まったものはないんです。こちらでこういう形でやれば参加と協働のまちづくりが、町も地域も少しでも進むのではないかなというような内容を答申として出していただければそれでいいかと思います。

ちょっとあまり整理されたお話ではないので、具体には、縛られる必要はないんですけども、例として一度皆さんに見ていただいたほうがいいですかね。

中嶋会長：そうですね。基本的なこととしては、町長に町としてこういうことをやってほしいということ住民側から上げていくということによろしいですかね。

藤原課長：ただですね、町にやりなさいとかという形だけではなくて、もっと広い意味ですよ。地域が集まってできている町全体のことがありますので、地域としてやはりこういうことをやっていかないと町全体のまちづくりが進まないよということもありますから、そこはお話として意見を出していくということは必要です。

それと、町は行政として支援しなければならないとか、町自体が持っている仕組みとかで足りないものがあれば新規で作るとか、そういったことによって全体としてまちづくりが進むねというようなイメージですよ。だから、町でやりなさいというような形だけではないということですよ。

中嶋会長：さっき佐藤委員から言っていたように、仕組みとしてはあるけれどもできていないところをできるようにするためにはこうしたほうがいいんじゃないかといったところとかですかね。

藤原課長：そうですね。地域づくりがよりよく進むための町の仕組みが必要であれば、それを提言する

というような話も入ってきますね。

中嶋会長：逆に地域だけでできますよというのは入れなくていいということですか。自分たちだけでそれは解決できますみたいなところは答申の中にそれは特に入れなくても。

藤原課長：ただ、先ほど申し上げた自助努力と言いますか、主体的に地域でやっていただきたいという、自覚と行動というのはやはり必要になってくる。理解が進んでいないということであれば、それはそれで地域の中で何とか理解して自分たちで主体的にやっていくという環境づくりをやってもらいたいなという。それがなかなか進みにくいということであれば、それは町が支援して自主的、主体的にやっていけるように頑張る町も支援していきますというようなイメージですかね。

阿部委員：住民自治によるまちづくり基本条例というのは、行政のための条例だけではないですよ。

藤原課長：ないです。全体です。

阿部委員：住民自治でまちづくりをしていくための基本条例だから、これは自治会とか住民にとっても基本となる条例ですよ。活発な町を作っていく、元気な町を作っていくために住民自治をどうやって進めていくかというような条例ですよ。ということは町に向けてだけのものではないだろうというふうに思っていたんですけども。

藤原課長：地域づくりは行政だけでやれるわけでもないし、住民の皆さんが地域づくりをそれぞれでやっていただくということを前提に、それでなかなか難しいものは町のほうで支援していくというスタンスでもありますので、そこは視点としてはおっしゃる通りだと思います。その中でもやっぱり地域の役割だとか、町の役割だとか、議会の役割だとかということで、皆で役割を持って連携してやっていきたいと思いますというイメージですかね。ちょっとざっくりした言い方で申し訳ないですが。

阿部委員：話し合いを進めている途中で、地域コミュニティの部分が一番大事だよという話でここまで来たと思うんですよ。なので、やっぱり行政に対しての話だけではないだろうというふうに思います。

佐藤委員：そこがすごく難しいところなんですけど、この基本条例が発足した経緯とかその時の状況では今言われたことで、皆が主人公で頑張らしようという感じで、それは誰も否定はしない、実際どうするかは難しいけども、実に素晴らしいものだと思えます。

ただ、あれからずいぶん時間が経って、あの時自治でやろうとしていたのとは別の次元で、さっき言ったような社会情勢が変わってきて新しく取り組まないといけない点が出てきたのではないかと私は思います。そういう点がもし今回浮き彫りにされれば、今までの基本条例プラス、なんかこうアルファというものを議論してもいい時期なのかなと思って。

当時から奮闘されている人は町が一生懸命やって、ある意味では柴田町のいいところだと思いますよね。だからこういったところは柴田町のいいところですねというものを残せばいいんですけども、私から言えば本当にすごいものを作ったなという感じで、一生懸命皆町のために動いてくれたんで、そういうものを全く否定するわけではなくて、さっきも言ったように周りが勝手に変わってきてしまっ

我々はそれとかみ合いながら生きていかなきゃないんであって、その変わってきている環境に対して、今までの自治基本条例だけでは必ずしも十分ではない面が出てきているのではないかとこのところを絞ればいいなど。

阿部委員：そうですね。話し合いの中でそれが見つかれば。

佐藤委員：ただそれは、もうこの7人でさえ温度差がありますから。私が10と思っただって3という人もいるわけですよ。そこはどういうふうにまとめるかによりますけれども。

ただ、意見は十分に言って、私も今言っていますけど決して誰かの意見を否定するつもりはなくて、そういう周りが変わってきているものに対しての対応という点では、前の自治基本条例は十分ではないような点があるなと私は思いますね。

藤原課長：逆に言うと、それが見出せたら、ここでそれを提言として出すことができたなら、非常にプラスアルファの有効な部分になってくるので見出してもらいたいなというのはありますね。やはり大分社会情勢が変化してるということなので、やはり補わなければならないもの、不足しているものがあるかもしれないですね。

佐藤委員：だから、さっき私が言ったように、私も新聞読んでびっくりしたんですけど、そういう中学生、高校生がいるというのは昔はあまり無かったんですよ。

だから、もし他の視点でそういうのが出てくれば考えなきゃいけないことが出てくるとは思いますけど。これは人のものさしの話だから、感じる人もいれば感じない人もいて、これはしょうがないですね。そこも含めてあとはどういうふうにまとめるかとなるとは思いますけどね。

藤原課長：事務局が求めているのは均一な意見ではなくて、いろいろな立場の人のいろいろな意見、見方、視点、そういうのがあって、人の意見を聞いたときにそれぞれ気づくところがあると思うんですよ。そういう気づきを得ながら、やっぱりこういう仕組みだとか考え方が必要だねということで出していだける。この多様なところから出てくるものを大事にしたいなという思いはあります。

中嶋会長：はい。ありがとうございます。

佐藤委員：私も議長が言ったように、そうしたほうがまとめやすいと思いますね。でないと難しい。何かあって意見言ってくださいと言ったら、雑談に近いアイデアばかりいっぱい出てしまう。

そうじゃなくて、町が考えている基本的な考え方があって、それに従ってまとめるということではない、私はそうしたほうがいいと思いますね。

中嶋会長：ありがとうございます。

ちょっと私なりに今のをまとめようと思います。資料1—2をもう一度見ていただけるといいかと思えます。これは私と事務局で作ったんですけども、少し今までの流れを整理したものですけれども、まず条例の検証をしました。今の社会情勢とか環境の変化に少し合っていない部分が出てきているのではないかとこのことで、平成30年度1回、2回、3回、4回目くらいまで皆さんで一個一個条例を見て、

ここはこうだという意見交換をしてきたところ、①、②、③と今の条例からもう少し強化したほうがいいんじゃないかというところが出てきました。それが、情報共有、情報環境が変わっているので情報共有における課題があるのではないかということと、あとは実際に条例のもとでいろいろな地域が運営してきているけれども、地域コミュニティに結構温度差が出てきているんじゃないかということと、あとは中間支援組織をもう少し機能強化していったほうがこの条例の目的というのがもう少し支えるんじゃないかという3つが出てきていて、これをすでに答申として上げてもいいんじゃないかというところが出てきているんですけども、さらに今やっているのが、特に話し合っていくときに②の地域コミュニティの温度差というところに着目して、地域の連携というところを少し話しましょうということで皆さんで絞りました。自治会内部のことというよりはどちらかというところのグレーのところですね、地域にいろいろな団体とか、役場も含めていろいろな方がいるんですけども、もう少しこのつながりを作ったほうがもっと地域が変わっていくし、結果的に自治会もうまく運営していけるんじゃないかというところで、今ここに対しての現状の課題とか、前回の宿題では課題に対してこうしたらいいんじゃないかというアイデアを宿題で皆さんに出していただいて、今資料の2、資料の3にまとめています。資料の2のほうで、これも事務局と私で分類分けしました。わあっと出てきたものを分けたところ、皆さんちょっとこれ違うかなというところはあるかもしれないんですけども、大体この人材育成と市民意識向上みたいな部分、あとは体制整備、仕組みづくり、場づくりみたいな話、あとは情報発信、共有、あとはお金の話と大体4つくらいに分野的には分かれているんじゃないかと課題の整理をしました。下のほうの点線の中で、右側のほうに、これに対して、さっき佐藤さんがおっしゃったように仕組み自体はあるものもあります。条例に基づいて町のほうでどんな仕組み、人的支援の仕組みとか場作りとか体制整備とかお金も用意していたりして、それがあの中で何で今皆さんからこんなに課題が出てきているんだろうという、なかなかそこでうまくいっていない部分があるからではないかというところで、今の仕組みで解決できるものは何が原因でうまくいっていないかということをお皆さんに一つこの場を出していただきたいのと、あとは新しい社会環境になって今の仕組みだけでは足りなくなっているところというのがもう一つあるんじゃないかということで、その2つをできれば皆さんにご意見いただいて、町の答申として出していただければいいかなというような話をしていまして、佐藤さんおっしゃっていただいた通りで、あとは課長がおっしゃっていただいた話というのはそういうところになるのかなと思います。なので、本当にアイデアまではいただいているので、少しそれを具体的な仕組み作りとかそういう人材育成のこととかそういうところに落とし込んでいくのが今回と次回になるかなと思っています。そういうお話ができたかなと思います。ということで、わかりづらかったかもしれませんがまとめてみました。大丈夫でしょうか。今4つの、事務局の資料3で人材育成、仕組みづくりなど4つに合わせて、今回皆さんにこちらに対して実際どういうふうな仕組み、今の足りない部分とか、新しくこういう制度を作ったらいいんじゃないかというのをアイデアをいただければかなと思います。

志子田副会長：あれだよ。どんな地域でもいろいろな課題あるけれど、ここに前回までの意見を4つに大まかに分けてもらって、その中で今日はこれについてちょっとお話をしてみようかというように進めたほうがいいんじゃないかなと。

佐藤委員が言っているのも、阿部委員が言っているのも、ここでじゃあ他の人はどう思うのということをお聞いて、やっぱりそれじゃあこういう形、ああいう形というのをここでちょっと話しておかないと時間も無くなるから、やっぱりその辺を、先ほどから言われているようにうまくいっているやつ、なぜうまくいかないのかということも、もう一つ皆で、またそのためのアイデアというものもあるけれど、その

アイデアを逆に言ったら町のほうにこうやればできるんじゃないかというのがあったら、例えばこういう仕組みに直せばここが改善できますよと、そういう方向を町に答えとして出さなきゃいけないんじゃないかなと。

完全にこうしろ、ああしろという答えではないと思うんだよね。だから、単純に言って、今日のテーマとしている地域連携の中で活動していて何がネックになっているかなという思いを出してもらえればいいんじゃないかなと。

俺はこれにも書いたように自分から一步出さなきゃだめだよというのを何回も口では言っているけれども、言っている限りは自分で出すようにしています。その中で見えてくるものというのがあるんでね。

そういうところをお話すれば、町のほうでもその他の自治体のほうでも、ああなるほどなど見てくれるんじゃないかなと思うんで、せっかく条例の中で協働という言葉で物事を進め始めたんですけども、今現在のこの地域連携というのは協働が、簡単に言うとうまくいっていないんだよということテーマとして浮き上がってきたんだから。

我々が条例を作った頃は、全国の自治体で協働、協働と騒いでいた時代だったんだよね。その中で協働がうまくいっている地域と、なかなか歯車が噛み合わない地域というのがあって、どうしたらいいのというそういうところで条例づくりに力を注いだはずなんですよね。ただそれが、東日本大震災で協働とかなんかよりも絆という言葉が出てきたけれども、その絆というのもやっぱり協働が無ければできなかったと思うんですよ。その辺を踏まえて、昨今言われているのは、震災後10年経ってそれが薄れてきたということは、まさにコミュニケーション、地域連携、そういうのが薄れてきたということを行っているんじゃないかと思うんだよね。それを、あの時のような災害が来てもちゃんとできますじゃなく、防災のマイタイムラインじゃないけど、日頃からこういう時はこうしましょう、ああいう時はこうしましょうというものを我々住民と行政が同じ目線に立てるようなものを話しておけばいいのかなと思っています。

自分自身今日来てみて、大きい一番目に人材育成・市民意識向上、全ていろいろなことをやっていると言えるなというのが見えてきました。体制とか仕組み、場づくりというのはこれは逆に言ったら私の場合は、ある程度整っているんじゃないかと。それから、情報発信、情報の共有というのでは、発信はいっぱいされているなど、共有は個々の感覚の問題があるから難しいなというのがありますね。

そういうところで今日は、例えば一番上の人材育成と市民意識向上、その辺に焦点を絞ってちょっとお話をやればいいのかと思います。そうすると、先ほど佐藤委員とか阿部委員が言われたように、上手くいっている、いっていないとかの事例もその中には出てくる。ただ、答申の時にはこういう形にしましょう、ああいう形にしましょうということでもいいんじゃないかなと思っています。じゃあ皆で、村山委員あたりから一言お話してみたら。

村山委員：先ほどの流れから言うと、まずはこの地域連携の事例紹介っていう話だったと思って。そこに出ている仕組み、今の仕組みでできるものという、何がその仕組みなのかというのがちょっと分からないので、だから、もしかするとその事例紹介の中でこの仕組みというものも理解して、きっかけになるのかなと期待しています。

それが終わった後に佐藤委員に質問があるんですけども、先ほど言った話も理解できて、佐藤委員のおっしゃるその答申するうえでの何が今上手くいっているもので、上手くいっていないものを出すうえでの、資料としてこれが有効かどうかということをお聞きしてらっしゃるのかなと思ったので、佐藤委員にとってこの資料がどういう意味を持つのかもちょっと聞いてみたいなど。この2点がありました。

中嶋会長：まとめていただきありがとうございます。進め方として、志子田副会長におっしゃっていた通り、事務局が資料3のほうでまとめていただいて、4点について、黒板のほうにも記入していただいていたんですけども、少しご意見をいただければと思います。ただ、やはりこの1時間の中で全部というのはなかなか難しいかと思うので、今おっしゃっていた通り、今日は人材育成と市民意識向上、もしできれば次の体制づくり、仕組みづくり、この辺はもうできているんじゃないかということでおっしゃっていただいたんですけども、その辺を少しご意見出していただけると書いていけるとと思います。

では、最初に私から事例紹介をさせていただきたいと思います。資料をお配りしていたものを見ながら、5分くらいですかね、簡単にご紹介したいと思います。他地域の事例ということで、他の地域ではこんな仕組みで地域の連携がうまくいっているよということをご紹介するような内容になっています。

(中嶋会長より大崎市岩出山地域の事例を紹介)

佐藤委員：そのコーディネーターという方は大学の先生なんですか。

中嶋会長：いえ、一般住民の方で、もともと……

佐藤委員：それを募集したんですか。

中嶋会長：はい。募集して。でも、もともとこの方は公民館の館長で、「1人」の声あり)はい。1人、女性の方です。今はやめて、別の方に館長は移って、コーディネーター専任になっていますが、今年までの事業なので、市からお金が出てコーディネーターさんは雇われているんですけども、次につなげていくために私は少しずつ引いて行って若い人に譲りたいということで、今自分の給料を半分にして、若い移住者の方に半分自分の仕事を預けて、後継者作りみたいなこともやっておられます。一般住民の方ですね。

村山委員：質問していいですか。大分あるんですけど。

岩出山地区って10,676人、その中の34地区、自治会というのは柴田町という行政区みたいなものですか。

中嶋会長：そうですね。岩出山地域の中にさらに岩出山地区というのがあって、コーディネーターさんは岩出山地区です。岩出山地区は5,000人くらいの町で、中学生以上だと大体3,500人くらいです。

村山委員：柴田町だと区長さんっていますけど、そういったものとはまた別のものなんですか。この地域づくり委員会の頭の方というのは。

中嶋会長：ちょっと岩出山が特殊で、行政区長もいて自治会長も別々の人がやっていて、行政区は16行政区なので、何個かの自治会が集まって一つの行政区で行政区長さんがいて、それとは別に自治会は自治会長さんがいるという二重構造になっていて、それはちょっと良くも悪くもあるところな

んですけれども、二重になっています。

村山委員：私聞き逃したんですけれども、まちづくり協議会というのはどういう方ってなっていましたか。

中嶋会長：まちづくり協議会は地域づくり委員会の連絡組織みたいなことで、岩出山地域だと岩出山地区のほかにも5地区あるんですけれども、岩出山地区のほか5つの地区の地域づくり委員会の代表の人でまちづくり協議会という連絡会みたいなものを作っているという。

村山委員：なかなか分かったようで分かりづらいですね。

中嶋会長：層が3層になっているという感じです。

村山委員：次の住民アンケートの実施があるんですけれども、これはコーディネーターさんが作っているんですか。

中嶋会長：これは私も入って一緒に作りまして一緒に考えました。このアンケートの項目も何を聞きたいですかというのは、自治会長さんにもヒアリングの時にアイデアをもらって、ちょっとこういうことを聞いてみたいというのは皆さんから意見を集めて作っています。

村山委員：あとはこの振興会情報ファイルというのもアイデアとして出たということですか。一般の方というか一人ずつの方へのアンケートは分かるんですけど、この情報ファイルの作成ってすごく画期的だと思ったんですけど。

中嶋会長：それはコーディネーターさんが考えて最初にやられたんですよ。

佐藤委員：中学生以上というのはすごいですね。何で中学生にしたのか分かりませんが何かあったんですかね。高校生でもないし。

中嶋会長：そうですね。中学生を入れるか迷ったんですけど、中学校にヒアリングに行ったときに中学校でもぜひ地域と生徒を連携させたいけどできないという話を伺って、じゃあ中学生の意見というのもまちづくりに反映していったほうがいいんじゃないかということで中学生を入れたということがあります。

佐山主任主査：結構全住民アンケートを取るときは中学生以上の全員、世帯主だけとかは絶対だめというのを学者さんとかも割とそう言われていますね。

中嶋会長：そうですね。

村山委員：交流・対話の場づくりのところの住民アンケート結果分析会、100人くらい参加して、この

後はどうなったんですか。

中嶋会長：この後、ちょっと前後違うんですけども、ここでやはり空き家課題が重要だという意見が出て、今度分科会みたいになって、空き家課題を考える会みたいなものができたり、何とかを考える会みたいなものが4つくらいできたのかな。一番盛んに空き家課題解決みたいなグループができて、そのワークショップでたまたまグループだった10人くらいでできて、登米市に視察に皆で行ってお話を聞きに行ったりとかいろいろ活動をしています。

阿部委員：そういう機会を持ったということがすごくいい。

村山委員：分析からまず設けるという発想はコーディネーターさんがやりましょうといった感じですか。

中嶋会長：そうですね。コーディネーターさんがやりましょうと、あとはやはり会長さん方が自分が出したことについて聞きたいという意見が住民のほうからあって。

村山委員：もちろん結果は文書では皆さんに出してたんですよ。

中嶋会長：そうですね。広報紙で、全体意見を出すのは大変なので10問ずつくらい1年間にわたってちょっとずつ広報で出して皆さんにもお伝えして、最後にじゃあ皆でということで、最後の5問はここに来ないと分かりませんみたいな感じで惹きつけて。

村山委員：あと2つあるんですけど、行政機関との連携・協働がありますよね。これのタイミングって最初からこうだったんですか。それとも何かきっかけがあったのでしょうか。ファシリテーターやボランティアで、ある意味あまりそういう方たちいないので、自分たちがやるよという、ハートがあるというか行政機関の方たちが来るというのはどういうふうな感じなのか。

中嶋会長：そうですね。やっぱりコーディネーターさんが結構市役所に行ったり、社協に行ったり、結構行っている中でじゃあ協力しますとか言っていただけで、人柄もあるのかもしれないですけど、「やって」と言って来てもらっているとは言ってはいたけど。やはり普段からのつながりなんだろうなど。

村山委員：すごく若い方が写真に写っているの。

中嶋会長：そうですね。若い人を出していただいていますね。

村山委員：あとはオンラインですよ。これは資金というか予算化されていたりするんですか。

中嶋会長：これは特に予算はないと思います。役所の方とかも平日日中にできないということで、土日に皆さん家からやっているの、ボランティアみたいな感じですね。

村山委員：広報紙も考えたりしているんですか。

中嶋会長：広報紙はコーディネーターさんが作っていますね。ブログも上げていて、消防団の活動を紹介しますとか、かなり情報発信一人でいろいろ頑張っていますね。

村山委員：ちなみにおいくつ位の方なんですか。

中嶋会長：この方は50代半ば位ですね。今はいろいろこういうのを見て、若い人が「面白そうだ」と3人くらい部下じゃないですけど来てやってくれています。そんなことで、これも一つの仕組み作りだと思うんですけども、こういう活動をしていますという事例を紹介しました。

藤原課長：きっと聞き逃したと思うんですけども、市内でモデル地区を3つ選んでということで、この目的というのは3地区のモデル地区のものなんですか、それとも全体なんですか。

中嶋会長：これは一つの地区だけです。このほかに2つあって。

藤原課長：他の地区もありますよね。3つ選んだら、例えば10地区あったらあと7つあるじゃないですか。そこを広げていく方というのは、この後にどういうふうな活動になっていくのでしょうか。

中嶋会長：今は多分実証事業ということで、今年度で終わるんですけど、ここから市のほうでどうするのかということは逆に地域から今すごく言われています。これ終わったらどうするんですかということ。

結局、市はお金を出しているんですけども、お金が無くなるとちょっとできなくなるところがあるわけで、そのあとどう変化していくかということも非常に難しいです。行政としては自立して最後はやってほしいということだとは思いますが、まだちょっとそこまではいっていないので。

藤原課長：3つの地区はある程度主体的に動くようになってきたというイメージなんですか。

中嶋会長：そうですね。逆にこれをやったことですごく他の地区と差がついちゃって、他の地区が「とてもあんなことできないや」みたいに若干引いている。そこが課題といたら課題かなと思います。

藤原課長：でも中には「あそこであんなにやっているのにうちらほうはさっぱりやらないんだ、やんなきゃだめなんでねえの」とかって言う人もいますよね。

阿部委員：そういう人がいればいいんだよね。

中嶋会長：そうですね。逆に最近は他の地区から見に来て、いろいろと話を聞かせてほしいとかということもあるみたいです。それをどう広げていくかです。

阿部委員：引っ張った人たち、連携したり、社会福祉協議会やまちづくり政策課、そこが得られるかど

うかですね。

中嶋会長：そうですね。やっぱりでも普段からの情報共有とかが一番大事だとおっしゃっていますね。掘り起こしよりは日常的に行くとか、来るとかという関係性が大事かなと。

阿部委員：まちづくりしていくうえでの感想はありますか。

中嶋会長：今言った通りアンケートとかそういうものは意味はあると思うんですが、やはりコーディネーターさんの普段からの関係づくりで、いろいろ、社協さんのところに行ったりだとかお互いの信頼関係がないとなかなか一緒に連携した取り組みってできないと思うので、なかなかすぐには、1、2年くらいは多分これやる前には時間はかかっているの、もう少し長期的な視点で見ていくことは大事かなと思います。

藤原課長：コーディネーターも長期的に継続して同じ人というか、積み重ねていけるような方がいたほうがいいというイメージですか。なかなかそういう方がいるかどうか。

佐藤委員：あとは、館長さんだったというのがよかったんじゃないですか。

中嶋会長：そうですね。

阿部委員：人脈もあるでしょうしね。

佐藤委員：それもあるかもしれないし、人柄もあるんじゃないですかね。

中嶋会長：結構女性というのもよかったのかなと思いますね。

阿部委員：アンケートって割と中身よりも、アンケートを取られたというその行為が大事だったりしますよね。

中嶋会長：皆で一緒にやっている、参加しているところも。

藤原課長：コーディネーターは市で委嘱している方ですか。

中嶋会長：そうです。

志子田副会長：今事例発表あった岩出山は、真山と岩出山と池月の3つになるんだけど、3年前までは私も岩出山地区の方といろいろ付き合いがあって、たまたま真山地区の区長やっている人がいろいろなボランティア活動で会ってお話を聞いたりしています。

大体この課題が出てきたのは合併したからなんですよ。小さい町の時はおらが町が一番、おらほがと、あんまり課題は見えてこなかったんだよね。これが合併したために岩出山にしても、栗原にしても、

ボランティア関係で付き合いが、単体だったら見えなかったのが見えてきたよというのが意外と大きいんだよね。

そういう中で一番言われたのは、俺らの次の代の人がいねえんだと。要するにここに書いてある人材育成なんだよね。なぜかと言ったら、あの人たちがやっているから任せていいんじゃないかという意識の問題なんだよね。これはどこの地域でも一緒なんだよね。その辺に観点を絞ってちょっと物の見方をしたらいいかなと思っています。

中嶋会長：ありがとうございます。

ご参考になったかわかりませんが、一つの事例として地域でやっているところを紹介しました。

残り、4時までなので40分くらいございますので、少し柴田町のことを考えたいと思います。

せっかく用意していただいたので事務局でまとめていただいたシートも使いながら思うんですけども、さっき志子田副会長におっしゃっていただいた通り、少しこの人材育成とか市民意識向上というところがやはり一番出来ていないんじゃないかというところで、そこら辺を最初に皆さんからご意見をいただきたいと思うんですけども。

村山委員：私は今の中嶋会長の事例はとても参考になったんですけども、学習の場づくりにしても意識の醸成にしても、多分共通の何かがあったほうがいいんじゃないかと。例えば最初に岩出山ではアンケートという共通の自分たちが課題だと思ったもの、自分たちが満足しているものを洗い出しているというのは、そこが全員の基準になって、そのためにはじゃあ集まって学習しようとか、あとは自分の一番気になっているところに関しては参加しようとか、学ぼうとかあるのかなというふうに思います。働きかけやすいですし、集まりやすいし、共通になる。アンケートの内容はいろいろあると思うんですけども、中学生からだとすると、中学生も参加できるわけですし、逆からも考えられるし、親が逆に中学生がどうということ考えているかもわかったりするんで、意外とそういうのは大事なのかなというふうに思います。それこそ人材も生まれやすいんじゃないかって、誰でも取り組めるんじゃないかって、すごく参考になりました。

実はこの条例ができて、地域計画を立てるうえで役場に相談しに行ったときに、まずアンケートを作りなさいと言われて、実はかなりの数のものを作りました。それで、80パーセント以上、4丁目地区では出してきて、それを分析して皆さんに公表して、その結果地域計画を立てました。次の年もそれに基づいてやって、その説明をすることで特にトラブルもなく、総会でも承認されやすい、あるいは私たち役員もずれにくいというんですかね、したいことをするのではなくて、何が求められているかに戻りましょうとなって、戻ったので、やはり皆が何を考えているか洗い出すこと、それこそが情報共有のものになるのかなと。自分が思っていることが出せて、拾ってもらえてということが大変大事なのかなと思いました。仕組み作りの基本になるものなのかなと感じました。ただすごく大変でした。だからあれからやっていないです。回収するのも大変、それをグラフにするのも大変だし。

中嶋会長：アンケートは一つの地区だけでなく全地区にやりなさいと言われてたことなんですか。

村山委員：おそらくまちづくり政策課からは皆さんそういうことしなさいって、でも強制ではないので。

私たちは何を作っていいかわからないから、やりますと言って、内容も一緒にまちづくりの方に相談しに行って作って、本当に勉強になったし、皆さんの考えも分かったかどうかはちょっと分からないで

すけれども、多分その時点では分かったので、やはりやらなきゃなど、大変なことを聞いちゃったなどという感じはするんですけど、大事なんだなって思いました。

中嶋会長：アンケートはいいかどうかわからないですけども、共通認識をもって話をするというそういう仕組みですかね。

人材育成・市民意識向上の中に、学習の場づくりと人材が生まれやすい、確保しやすい環境づくり、当事者意識の醸成、誰でも取り組める工夫と、今4つあげていただいています、これに沿ってもいいですし、重なってもいいと思うんですけども、この辺を解決できるような仕組みとか、今はこういうのがあるけどちょっとこういうことができていないとか、使いづらいとかそういうのがあれば少しご意見をいただきたいんですけども、他に何か、皆さんやられていて実際に場はあるけどうまく使えていないとか、こういうふうにすればうまくいくとか、ここの場もそうかもしれないですが。意識向上とか一番難しいところですけども、人材育成とか。

志子田副会長：一番難しいところだね。いろいろな審議会で何回か言っているけれども、例えばこの中で、人材が生まれやすい、確保しやすい環境づくりというときに、二言目には企業とかそういうところに人員を出してもらったらとか言われるけれども、ただ、現状ではそれを無償というか、要するに派遣してくれるところに何か対価があれば相手はOKなんだよね。ところがそういう仕組みが日本の社会ではできていないんだよね。例えばお祭りがあってみこしを担ぐ人がいないから、ちょっと人材貸してくれ、協力してくれと言って、それじゃあ出しますよと言っても、その人は休みを取らなきゃならないわけですよ。休みを取るということは、例えば有休を使えば会社としては損失になるわけだね。その時にそういう企業とか経営者に対して何かの特典があるような方法というようなものをこれから先は考えなければいけないのかなと、これは国全体として考えなければ、今は地方疲弊とかと言っているけどそういうのにもつながってくるのかなと思っているんですよ。

実際のところ私自身もいろいろなことをやっていて、3年前までは会社員でいました。その結果なかなか思い通りにいかないときもありました。ただ、その中でこれから、町から発信して県、国を動かせるような意見も今回の答申の一つの目玉にあげてもいいかと思っているんですよ。住民へだけの発信、答えだけではなく、今の世の中の仕組み作りの中でこういうものがあると地方の疲弊はもう少し防げますよと、そういうものを目指すのもいいんじゃないかなと。

中嶋会長：ありがとうございます。ちなみに今行政のほうで人材育成とか市民意識向上に対して、現在の仕組み、制度というのはどういったものがありますでしょうか。

佐山主任主査：学習の場づくりとしてはやはり出前講座でしょうか。

大庭委員：学習の場づくりのところで私が今日書いてきたのは、例えば出前講座っていうのは社協もあるし、町もあるんですけども、生涯学習課とか各課でも出前講座に限らず市民向けの講座とかたくさんあるけど、情報が一元化されていないような気がしています。

福祉センターの中でも「今日こんなことやってたの」というような、例えば健康推進課で介護予防をやったのを福祉課のほうの私たちが知らなかったとか、意外と縦で動かれていて、出前講座は社協も町も一覧表にはなっているんだけど、各課が行っている市民向けの学習の場っていうのに、それに参加す

る人たちが一元化されていて、私たち自身が横でつながってなかったりしているんじゃないのかなというところが気づいたところだったので、そこのところは今回やはり学習する場ということは、シニアの皆さんが何か問題や課題をもってやりたいと思っているところを、どこの窓口というところも含めながら一元化できないのかなと。

阿部委員：出前講座、この前社協さんのを受けたら、とてもよかったんです。勉強になったねってみんな喜んでんですけど、その直前に受けた出前講座、それは役場のだったんですけども、本当に受けなければよかったと皆思っていました。防災だったんですけど、町は何もしないよ、避難所は最初の2、3日は職員いるけどその後は自分たちで運営するんだよと、じゃあその各地区で運営するたちの話し合いが必要ですねと言ったら、そんなのはあんたたちがやりなさい、食べ物は出しませんとか、そういう切り捨てられるようなお話だったんですよ。どうしたんだろう、機嫌悪いのかしらと思うくらいの話で、やはり出前講座というのは、お勉強になる講座であるためにある程度の質を皆で作って持ってきてほしいと思うんです。それを担当者のスキルであったり人柄であったり、そういうもので壊さないでほしい。勉強になる出前講座をしていただきたい。それで、帰るときに、文句あったら町長への手紙でも書いてらいいさと言って帰っていった。そういう出前講座もあるんですよ。

なので、出前講座に限らず、学習の場って、ワークショップとかいっぱいいろいろなことをしたらいいと思うんですけども、人材育成という意味では行政職員、役場の方々皆さんが住民のほうを見てくれるよと感ずることが一番大事じゃないか、それが最初の基本じゃないかなって気がするんです。町長のほうを向いてばかり仕事しているんじゃないのというじゃなくて、私たち住民のほうを見てもらっているなというところから住民の参加も始まってくるんじゃないのかなと。その基本かなと思います。

中嶋会長：どういう対応だったらこっち見てくれているというふうに思うんでしょうか。

阿部委員：まず挨拶から。まず朝の挨拶からしてくれる方と全然無視している方がいます。

自治体によっては、銀行並みにとんでもなく「おはようございます」と言うところもあるし、その辺から気軽にお願いができたり、お話ができたり、相談ができたりということの最初の出発点かなと思いますね。

学習の場づくりとか、人材が生まれやすい環境づくりというのは、地域でいえば参加をどうやって増やすかということだと思うんですね。当事者意識もそうだし。どうやって参加を増やすかというところから入るべきだろうと思っているんですけど、その前にそういうところをお願いしたい。

佐藤委員：それは、3日間は町が一生懸命世話しますよみたいな説明が欲しかったんですか。今は当たり前ですよ。

阿部委員：当たり前かもしれないけど、私たちそれを聞いたメンバーは、避難所に行けばヤマザキパンくらいもらえるのかなとか、毛布も食べ物も全部自分で持ってきて、いずれ運営は自分たちでやるんだよと言われたので。

じゃあ地域の人たちでそこをどう運営するか日頃から事前に顔を合わせておいて、リーダーがいっぱいいいたら困るので、そういう打ち合わせの場を持っていただくといいですねというお願いをしたら、そ

それはそうなんだけど、自分たちは3人でこの仕事をやっているから手が回らないのであなたたちが考えなさいと。

民生委員さんが、この間一人暮らしで困っている方のアンケートを取ったんですけど、あれはどう役場で生かすんですかと言ったら、いや取っただけでしょと言って。

佐藤委員：そうすると、その時皆で話し合っただけで準備しなきゃいけないという気持ちになるようになればよかったなという意味ですか。

阿部委員：いや、違う。

佐藤委員：違うのか。でも、皆がやらなきゃだめですよというのは、冷たい言い方だけど、現実だよ。言い方に問題があったのかな。

阿部委員：そうなんです。言い方なんです。

佐山主任主査：言い方もあったんでしょうけど、佐藤委員がおっしゃるように、多分現実だと思うんですよ。

阿部委員：現実かもしれないんです。ただ、言い方なんですよやっぱりね。

佐山主任主査：個人的には、出前講座ありますと言いましたが、出前講座の質を上げるという話については、出前講座が本業かという矛盾もあるのかなと。

阿部委員：そこまで一生懸命じゃなくても、ある程度、年に1回くらい集まって打ち合わせしたらまた違ってくるんじゃないかなと。

大庭委員：逆に住民目線で、出前講座って職員誰が行くかわからないんですけども、社協の場合はこのプログラムで行きましょうねという部分のスキルはある程度確認するので、誰かが住民目線で聞いて、ちょっとここはこう直したほうがいいよねということが必要なんじゃないのかな。

佐藤委員：前もってなんかやったほうがいいですよ。

大庭委員：一回ね。こんなプログラムで行くけど、言葉とか、住民に対して。

阿部委員：私たち地域の人に、あなたたちのためにこうしたらいいと考えてくれていると感じられることが大事だと思うんです。だから、そっちはあんたたちがやりなさいと線を引く場ではないと思うんですよ。

村山委員：次のページにある、気軽に声が出せたり、相談できるきっかけづくりに出前講座がつながっていけば、ここに相談できるんだよねということが大事ですよ。

佐藤委員：町の人とは別にそういうつもりで言ったわけじゃないけど、阿部委員が言われた表現は手厳しいけど現実はそのだよ。自分たちでやるしかできないよね。（「相談してねという内容があったら」の声あり）その時に我々がやらなきゃいけないねという気持ちになるような話をしてほしかったということかな。

阿部委員：みんながっかりして帰っていったんだもん。みんな受けなきゃよかった、聞かなきゃよかったみたいに。

藤原課長：行政の立場から言うと、出前講座は住民との大事な接点なんですよ。大事な接点だからそこでどう思われるかというのは非常に大きいんです。あまり軽く見ないほうがいいんじゃないのかなと思うんですけども。何でしょうね、行政の立場はあるんだけど、寄り添う同じ目線というか、寄り添うような雰囲気やらないとだめな部分もあると思うんですよ。

佐藤委員：そういう気持ちがフィードバックしていくような道があるといいね。まず最低ね。

村山委員：アンケートは無かったんですか。

阿部委員：無いです。町長に書けと言われたこと書こうと思ったけど。

佐藤委員：表現は冷たいけど、俺も女房に3日だけだからね、あとは自分たちだからねと言っている。現実はそのだと思うよ。ただ、そういうふうに聞いて、皆ががっかりしたというのは残念かもしれないけどね。

藤原課長：例えば今のところで改善点はあるかもしれないなというのはあるんじゃないですか。行政のほうで共通認識で、こういった姿勢で行きましょうという話はあるかもしれないですね。

佐藤委員：ある意味ではそれが問題かもしれないね。現実はそのだとしても、受け取る住民が動けるような何かね。

阿部委員：行政って、線を引くんじゃなくて、やはり一体になって何かするんだって、乗り越えるんだって。

佐藤委員：それは言葉としてはきれいだけど、現実には難しい。

阿部委員：でもそんなにくっきりと線を引かないでほしいという。

村山委員：次につながる出前講座じゃないと。（「そうですね」の声あり）

佐藤委員：そうすると次にフィードバックがかかって、だんだん良くなったねとなればいいんだね。

村山委員：私たちはこれをやるけど、こっちは頼んでいいんだとか。こっちは頑張れるとか。

阿部委員：出前講座をもっと皆利用したらいいと思うんですよ。

佐藤委員：難しいけど、それが課題というか、そうなるべきなんだろうね。

大庭委員：社協も例えば防災の出前講座に行かせていただいたときに、そこが地区なのか、学校なのか、子どもたちなのか、そこは打ち合わせをして受け取る側のほうでどんなことを求めているのか、主催する側がどんなことを聞きたいですかというのは突っ込んで準備しますけどね。

佐藤委員：それは素晴らしいね。そうしないとだめだね。

大庭委員：ただ一方的にやってというのは、金太郎飴ではないので、行政区は全部ニーズが違うと思うので。

阿部委員：市民意識の向上とかは出前講座を聞きに行くだけでも大きいことだと思うんですね。

村山委員：一つステップアップですよ。

佐山主任主査：出前講座聞きに行きますかねというところはどうなんでしょう。

阿部委員：この間は意外な、よく歩いて来たねというようなおばあちゃんとかがいましたね。

佐山主任主査：誰の意識が向上すれば特にいいのかなというのはどうでしょうか。市民の意識とカテゴリーは分けましたけど、そこが見えていないかなという気がちょっとするんですね。意識が高い人が割と出前講座を受けているようなイメージがあるんです。だから出前講座の質を上げれば解決するかと言ったら私はちょっとしっくりこないんですが。個人的には。

阿部委員：前回の意見シートの時に市民の意識向上みたいなことを私は書いたんですけど、仙台のバスの中に、多分議会のことだったのかな、「あなたにできることはなんですか」というポスターが至る所に貼ってあったって仙台に行ってきた人から聞いて、そういうふうに至る所にポスターが貼ってあって「あなたにできることはなんですか」と聞かれると、ついつい考えちゃうだろうなという、そういう働きかけとかで、皆が少しずつ興味を持つとかちょっと考えると、そういう意味で書いたんですけどね。

中嶋会長：多分場はあるみたいですね。出前講座なりそういう学ぶ場みたいなものはあるけれども、来ている人は割と意識が高い人が来ていて、そこでも来て終わりみたいになっちゃっているんで、そこからまた次に相談したりとかできる仕組みも必要ですし、あとはそれに来ないような人をそこにどう結ぶるかという、意識が低い人を巻き込む仕組みみたいなものはちょっと必要かなと思っています。そこをどうすれば。

佐藤委員：それが政治そのものであり、永遠の課題だけれども、結局こういうのを一生懸命繰り返していくしかないんだろうね。こんな素晴らしいことやっていたって次のあれがなかなか難しいって言うているくらいなんだからね。これはすごいよね。なかなかできない。そういうのは永遠の課題だよ。

中嶋会長：ここにいらっしゃる方は多分皆さん意識高い方だと思うので、あまりないかもしれないんですけど。

佐藤委員：だってその班だって痛い目に会わなきゃ動かないし、考えないよ。正直言って。

阿部委員：そういうところで、人材育成っていうのは、意識の高い人がまず生まれるじゃないですか。それで、その人たちが地域でいろいろな仕掛けをしていくことになると思うんです。例えば、一つの例ですけど、うちの地区で一人の副区長さんが会長になって、側溝に落ち葉がたまるので、1軒1軒歩いて、ここの側溝をきれいにする会を作るから会員になってくれと回って、全く行政区に出てこない若い世帯の旦那さんたちも参加する会ができて、これからもやっていこうとか、そこから会話が生まれたとか、まずはリーダーを作ることかなという気がする。あとはもう、地域はまめにコミュニケーションを取って歩くしかない。

中嶋会長：例えばリーダーを作るとしたらどういう仕組みが、リーダーを作るためにはどうしていけば。

佐山主任主査：これも個人の意見ですが、思っていたのは、なり手不足だという意見が一方であるんですね。おそらくそれがなぜかというのは、志子田副会長も先ほど近いことを言っていました、今の役職とかリーダーをやっている方にすごく仕事集中していることを見ているから、なりたくないというのがあると思うんですよ。一方で、やはりリーダーは必要だと。そこら辺が、皆で分散をしたほうがいいのか、引っ張っていく人が必要なのか、両方なのでしょうけどそこら辺は難しいなと思っていて、どうなのでしょう。

佐藤委員：コーディネーターというのがすごく良くて、親分、子分だとか地域のあれって目に見えないことがいっぱいあるんですよ。私が去年班長になって、社協さんの銭集めをやめさせたんだけど、かみさんは「黙っていればいいんだからね、去年 500 円集めたんだから出せば済むのよ」って、そういう世界だから。何か言うとたたかれるとか、区長が俺の家まで来たんだから。何してるのって。そういうんだからやりませんよ皆。そういうコーディネーターとかならね。

阿部委員：その地域の人じゃない第三者ということね。

佐藤委員：東京で避難訓練の時に、例えば、車いすの人をどうやるかという、一番いいのは隣近所の人やればいんだけど、隣近所でけんかしていて、あいつなんか絶対に手伝わないという人間関係になっていた時に、隣の人が避難訓練の時に車いす皆で手伝いましょうときれいごと言ったって運ばないわけですよ。それで、東京では現実を冷静に見て、あの人とあの人、あの人と3人で車いすの人を運んで避難訓練しましょうとお膳立てしたんだから、そういうんでないと、隣近所がやれてすごいという町

もあってすごいと思ったけど、現実、うちでもこっちとこっちがけんかしていてそんなに助け合わないんだから、現実は。だから、そういう制度を利用しながら。これは素晴らしいですよ。

中嶋会長：コーディネーターはあくまでも主役じゃなくて裏方で、やる人は住民の人ということで、そのやりたい人をやらせてあげるためにお手伝いをするというようなもので、リーダーとはまたちょっとコーディネーターの場合は違うかなと思います。市民一人一人がリーダーになれるようにサポートするみたいなことでやってらっしゃるので。

佐藤委員：リーダーはやはり素質があるから皆やれないよね。やれる人はやれるけど。

大庭委員：志子田副会長のところの 17B 区の事例で、お助け隊というのがうまくいった事例ということであって、ここでは人材ってどういうふうにしていたのかなって聞いたかった。やはり有償にされていたということがあって、今度お話を聞きに行こうかなと思っていました。

志子田副会長：ぜひ遊びに来てください。

うちらほうのお助け隊というのは、前の前の区長のときかな、たまたま年寄りの方で庭木を隣の家に出ている部分だけでも切ってもらえないかという話から始まったんだよね。区長の方に一人暮らしのお年寄りが相談したらしいんですよ。区長は、俺道具も無いし、何も無いからどうするという話になった。俺は、誰も住んでいない実家の家の周りを整備するので、そこそこの道具持っていたんだよ。それで俺のところに行ってきて、区長が手伝うんだったら俺もやるよと。それで、困りごとを助けたんだけど、ごみ片付けまでやらなくちゃいけないから、区長何人かに声かけてというのがお助け隊のスタートだった。

その頃は例えばエンジン付きのものを使っても油代は出なかったけど、5年くらい前からかな、やはりただでやってもらうとなると、相手方がものすごく気を遣うわけだよね。だったら油とボランティア保険に入る金額くらいはもらえばいいんじゃないという話になったんですよ。それで、お茶菓子どうのこうのと言うから、そんなこと気にしないでいいよって言っていたんだけど、ある時晩酌にでもというので用意してもらって、それからはそれくらいのあれで協力しましょうということになった。

お助け隊というのは副区長が名目上は隊長なんですよ。その人が指名して都合を聞いて、誰と誰と誰が手伝ってくれとその都度結成するの。刈り込みばさみとか脚立とかヘルメットとかの一部の道具は区費で明るい地域づくりとかいう名目で購入しているんですよ。ほとんどは経費の部分だけもらって、ごみ処理場に持っていく場合は軽トラックのガソリン代と向こうでの処理費用だけは最低限かかりますよと。

年に少なくて1件、多いときは3件くらいかな。それ以上やってしまうとなかなか皆とのあれができないから、あまり数多くはやっていません。それと1人で動くのはやめようと。内容的に詳しくは、うちの区長が規約みたいなものを作っているから。形の上では、結成そのものは副区長が権限を持っているよと、相談受けたときに結成してやるかどうかは区長が決断してもらうだけで。

佐藤委員：役員は毎年互選で変わりますよね。それでも引き継がれているんですか。

志子田副会長：規約が作られているから。そのために規約を作ったんですよ。自然消滅させないため

に規約を作って、お助け隊の責任者は副区長が負うと。

阿部委員：副区長って、他の地区では聞かないですよ。

志子田副会長：要するに本区長が倒れた時の職務代理者が副区長なのよ。

阿部委員：区長会というのがありますけれども、あれは諸連絡とかですよ。自治会長会というのがあるんですかね。

関委員：ないよ。

志子田副会長：柴田町にはないね。

阿部委員：リーダーである自治会長が他の地区で何をやっているか勉強するとか、副区長は各地区2人いるのかな。

関委員：違うよ。人数で。

阿部委員：人数でいるんですか。

藤原課長：それは、町で委嘱するときに副行政区長というのが、世帯が多いところは正と副と置く。そういう行政からの委嘱のやつです。

阿部委員：副区長のワークショップなんてやったらいいのになと思ったんです。

関委員：うちなんかは片方は区長、片方は副区長でもいいと思っているんだけどやらないんだよ。600世帯以上あるでしょ。うちの区は。

阿部委員：600世帯もあるんですか。

志子田副会長：柴田町では600世帯を超えているというのが、槻木でも3つある。

関委員：何をやるにも、でかすぎて何もできないんだよ。それで63年間、私に来てから20年経つけど、大庭さんには1回だけ消防訓練で来てもらったけど、それ以外は何もやっていないんだよ。役場から見ると10区からは何も上がってこないからよっぽどうまくいっているんだなんて思っているらしいですけど、とんでもないね。

大庭委員：それでも、高橋区長さんになられてすごくポジティブにいろいろと。

藤原課長：今の話で構造的なことを言うと、行政区長さんは個人なんです。自治会長とか町内会長と

というのは団体の長だから団体を代表する人なので、私たちが例えば地域づくりといった時には、本来は自治会長や町内会長、その団体と町と一緒にどうしましょうねという話になるはずなんです。行政区長はあくまでも町のほうで一人の個人としてお願いをしているので、二重構造になっているというのは確かにあるんです。同じところがほとんどなんですけど、違うところもあるんですよ中には、自治会長と区長が。そういう構造だと思っていてください。

志子田副会長：柴田町は7割くらいが一緒なんだよね。

佐山主任主査：もっとですね。おそらく9割くらいは一緒です。違うところが3つとか4つくらい。

阿部委員：行政区長会じゃなくて、自治会長として集められたらそっちの意識になりませんか。

藤原課長：どちらかという、地域づくりはやはり自治会とか町内会の活動なので。そういうことです。ちょっとそういう構造的な理由はあって。

佐藤委員：それこそどこかでメスを入れる必要があれば、腹決めなきゃいけないよね。だけどなかなかできないんだけど。そういうのが課題なんじゃないの。

志子田副会長：平成25年前後に本当はそれにメスを入れようとしていたんだよね。そういうのはできなかった。

阿部委員：行政区の人数ももう少しこう。調整しようとはしたみたいですよ。

志子田副会長：その頃に、今から6、7年前に今回の岩出山の事例なんかと同じように、大きい単位のところは区で、その中で従来のところは自治会組織でというのは条例審議会の最初スタートしてそんなに経たない頃にそういう話はあったんだよね。だけど区長さんの大部分が反発したわけよね。

佐藤委員：それこそ町議会かなんかでやるのは難しいと。

志子田副会長：財政再建の最中だったんで、要するに現状の区長の歳費を確保するのが厳しい状況が続いてきた時代にそういう話はあったんだよね。だけど、実際には歳費は一律からこうだあだといじくったみたいですけども。

藤原課長：時間もあれなので、ちょっといいですか。私も整理をし切れていないんですけども、皆様のご意見を聞いて、人材育成とか市民意識の向上、その辺でいうと、学習の場づくりということでも出前講座とか研修とかそういったものがあるというのも聞きましたし、もう一方では意識を高めるのに情報発信であったりとかチラシとかあるのかもしれないけれどもそういうのもありました。

あとは阿部委員のほうからは参加だという話がキーワードとして出てきたんですけど、実践することが一番の学習の場だとかいう感覚もありますし、じゃあ参加してもらうためにはどうするんだということ、また話が、何て言うか、根深いかなという感じはします。どれに優先順位をつけてやっていっ

たらしいんだというのがちょっとまだ整理はできないし、もしかしたらそれは、複合的なもので、これに力を入れていったらいいんじゃないかと、これが重要なんだけど、これもこれもやっていかないと難しいんじゃないかとかというイメージしかつかめていないんですけれども、その辺で何かご意見をいただければ事務局としてはありがたいと思いますけれども。

大庭委員：誰でも個人レベルでも取り組める工夫って一番下にあったと思うんですけれども、まちづくり政策課でSDGsも担当されていると思うんですけれども、皆さんもコロナで半分吹っ飛んでいるかもしれないですけど、あれは本当に誰も見逃さないというのが基本条件なので、子どもから高齢者まで、お金のある人も無い人も含めて自分ができることを一つやりましょうと、阿部委員の先ほどのバスのキャッチフレーズではないけど、その辺から攻めていってみたいんじゃないのかなというふうに。本当に17項目の中に126あって、お子様でもできることはあるんじゃないか、生活困窮の方でも、やろうと思ったらエコできるよねとかって考えることを一つやってみたら、提案できたらいいのかなというふうに思っていたんですけど。

志子田副会長：17項目のうち一つでも。

大庭委員：一つでもあなたがやれることをやってみましょうみたいなキャンペーンでどうですかね。初めの一步みたいな。

藤原課長：やりやすいからね。

大庭委員：環境だったり、食べることって毎日皆さんやってらっしゃるし、エンジンを止めることだってエコだし、というふうの一つ行政のほうから町民に提案してみたら。ゆるく浅くできることからやろうよみたいな、子どもでもできるよみたいな。

藤原課長：ゆるい促しというのもこの中にも出てきていたから。

阿部委員：そういう投げかけがあって、皆が皆参加するとは限らないけど、そういうのがまちづくりの機運っていうか、そういうのをじわじわと作っていくんじゃないのかなという気はするんですよね。

中嶋会長：ちょっと私のほうで今ずっと皆さんの話を聞いていて、やはり情報の共有化とか、おっしゃっていただいた共通認識を作るとか、先ほどの出前講座のところで、情報が一元化されていなくて、いろいろなところから情報が出ているけど区長さんも全部把握していないものもあるとか、やはり情報をまず皆さんで共通に持てる、誰でも市民が持てるようにするというのが必要なのかなと思います。そうすると意識が低くて今は参加していない人も、他の地域でもアンケートとかやっていると、情報がなくて参加していないという人が結構いらっしゃるんですね。なので、皆さんにどう情報を行き渡らせるかというところは結構ポイントなのかなと。SDGsの取り組みも皆に知ってもらわないと始められないわけで、そこがちょっと今の町の仕組みだと十分にできていない部分があって、団体同士の情報共有ですけど、団体さんから市民への情報発信とか、その工夫というのが最初の一步として重要なのかなと。仕組みとかは結構あるし、アイデアもやっている人は何かありそうだし、実際お助け隊とかいい

仕組みもあるけど、他の地域の人には知らなかったり、この場でも情報交流みたいになっていたの、そこできると自然につながって、活動も生まれるのかなとちょっと思ったのですが、いかがですかね。結局はそこで、そこを少し話し合うのもいいのかなと思ったんですけども。多分次回に何を話すかというところで少し絞っていかないといけないので提案したんですけども。

阿部委員：情報発信の仕方とか受信の工夫とか、そういうのが宿題になるんですかね。

中嶋会長：団体間でもどう情報を共有していくかということも多分、まあ、最初からそれはテーマに上がっていたと思うんですけども。

佐山主任主査：今回時間も足りなくて、まずはということで人材育成とかから少しご意見を出してってもらって、多少、ここら辺かなというポイントは見えてきてはいるんですけども、先ほど委員長もおっしゃったように、結局情報発信とか共有なんじゃないかとかそういう話もあるので、やはり我々事務局が出した論点を一通り意見を皆で出してもらったほうがいいんじゃないかという気がちょっとしていたので、なかなか議論の場は設けられないんですけども、これを宿題にしてというのはどうでしょうか。あくまで、一人一人が考えて、こういうところがポイントなんじゃないのと出して共有して。

阿部委員：今日埋められなかったところを埋めればいいですね。

佐山主任主査：それも含めて。今回人材育成のところは多少話しましたから、これはもちろん資料としては出しますけれども、人材育成の部分も含めて、今日佐々木委員と児玉委員もいらっしやいませんし、お二人の意見も含めて、次の審議会までに2往復くらいすれば、何となく皆さんの意見の中で共通する意見であるとか、ここら辺だなというのが出るんじゃないかなろうかという希望的観測も含めて、宿題大変ですけどもいかがかなと。

佐藤委員：出すのはいいけど、条例審議会としてどうなのというのがないと、だから何って言いたくなっちゃうのね。さっきの事例も事例としては結構で、全然否定はしないし、素晴らしいしできればいい。だけど、条例審議会としてのつながりとか関わりとかまとめというのがいまいまいちわからない。

藤原課長：ベースとして今までは地域起点ですから、まちづくりも地域づくりもそれは大事なところなので、そこで皆さんの意見とか感じ方ということでいろいろ書いていただいたのは、これは本当に大事なベースなんですよ。

ただ、これを広げるだけ広げるのではなくて、もうそろそろ皆さんで、今回宿題という話もありましたけど、出していただいて、そろったら重複している部分も出てきますし、絞っていくならこのところを絞って仕組みを提案していこうとか、足りない部分は何だということを議論していきたいなと思っているんですけどもどうでしょうか。

佐藤委員：そうすると、そういうようなところに絞り込むというか、つながるような形で意見は皆でいっばい出そうと。

藤原課長：そうです。だんだん絞れてきてはいるんですけどね。

佐藤委員：だからそこをね、もちろん自由に意見は言わなきゃいけないんで、感じることは皆さんで言ってもらって、それを揉みながら町としての課題だとかやらなきゃいけないことというのを絞りましょうかとか。そこをうまく言ってもらいたいなど。

藤原課長：あとはいただいた意見はできるだけ事務局で整理して、皆さんにわかりやすいような形で見ていただけるようにして、焦点絞りやすいように、議論しやすいようにちょっと整理は頑張ってみたいなどは思うんですけどね。

佐藤委員：事務局は、すごい大変だなと思うのね。こうやって一生懸命やってね。皆で意見をわあって言ってね。仕事だと言えば仕事なんだけど。効率よく、無駄なくやらないと担当大変だよ。そこをね。

佐山主任主査：体系立っていないから難しいところではあって、佐藤委員からもいろいろとアドバイスをいただいたんですけども、何となく私個人として答申の中で重要視したいなと思っているのは、概念的な、机上の空論のような、それはそうだよねと言えるような意見で終始したくないので、非常に具体的な意見を一旦出してもらおうというところをちょっと今回やっているんですね。

佐藤委員：町としてこういう絞りとかたたき台があるんだって言ってもらったほうがいいんじゃないかなって。

佐山主任主査：そうなんですけど、それって今までのしゃんしゃんの審議会なんです。私たちは本来であればそういうことはしたくないんです。我々も市民の人たちにこう言ってもらいたいんだよねというものを作ってそれをたたいてもらって出せば簡単だし、我々としても痛いところじゃないところでやるのでいいんですけど、それも本末転倒になってしまうということがあるので、やはり市民の人たちが日頃感じている課題感であるとか、こういうところ問題じゃないかというのを出したうえで、それをさらに一般化してまとめ上げられれば一番理想なんです。それと、残りの回数の問題ということバランスを取りながらやっていくということで、非常に難しいんです。

藤原課長：ただ一般論でまとめるんだったら、他のところでやっているものを持ってこればいいじゃんという話になってくるので、柴田町の状況とか皆さんの感じていることとかで生々しい仕組みみたいなものを、これは柴田町で我々がいいと思って考えたんだというものがもし出てくるとしたら、それは私はずごくうれしいというか、期待したいなと思っていますところなんです。

いわゆる一般的に、全国的に共通で使っている仕組みがあります、それを持ってきてやればいいじゃんという話ではなくて。

そのためにちょっと皆さんにご苦労していただいたんですけども、自分の暮らしだとか、地域での活動だとかそういうところから出してきて、柴田町らしいものを何か提案できればありがたいなというところなんですけど。宿題多くてごめんなさいね。

阿部委員：宿題は自分の分からないところは書かなくてもいいですかね。

佐山主任主査：全部埋めるという話ではなくて、現在の仕組み、制度で解決できていないことであるとか足りないことはこうだということを言っていただいて、2往復くらいすれば、こういうことあればいいよということに対して、例えば先ほどのリーダーの話も、リーダーがいればいいと思うんですという意見だけだったとしても、でもリーダーに責任が全部負うのはだめなんじゃないですかとか、そういうある意味逆の意見もあるかもしれないので、そこを1往復くらいすれば何となく少し議論した感じになるのかなというのはあるんですけどね。

阿部委員：苦肉の策だね。

藤原課長：あとはうちのほうで、町のこういったものへの仕組みって使われていないものや御存じないものももしかしたらあるかもしれないので、うちでもちょっと調べて整理して見ていただけるようにします。

佐山主任主査：こういうこととアイデアを出されたやつに関しては、これに関してはこういう制度が実はありますよという情報提供もします。

阿部委員：それを今日は最初に実は、どんな仕組みあるんだろうなと思っていました。

佐山主任主査：それは本当に申し訳なかったんですけども、全ての仕組みを網羅するというのはなかなか難しかったので、論点が絞られてきてこういうことってなったときに、これに関してはこういう制度があります、こういうことに今はなっていますというようなくらいだったら、何とか私でも調べられるかなということで、ちょっともう少し絞られるといけるかなと。

藤原課長：今度は状況も少し入れます。もしかしてそれ使えるのに、知らないということは、何かしらこちらでも問題や課題があるんだという話になってくるので。

阿部委員：皆が知るための工夫というのが課題になるかもしれないですね。

佐山主任主査：かえってそういうことかもしれないですね。先ほどの情報の共有の話ですね。

中嶋会長：少し町のほうの今やっている取り組み、現在やっていることとか出していただけると、そこから少し手掛かりに、じゃあこの仕組みをこう直したらと考えやすいのかなと思いましたので、ちょっと調べるの大変だと思いますけどよろしくお願いします。じゃあ後は事務局にお返しします。

6. 閉会

志子田副会長から挨拶

(その他として、事務局から現在実施している行政区現状調査アンケートの取り組みなどを情報提供)

以上で、全ての議事を終了したので、会長は午後4時20分閉会を宣言した。
本会議の顛末を記載し、その内容が相違ないことを証するため、次のとおり署名する。

令和 年 月 日

会議録署名委員

会議録署名委員